

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	秋のさけび : 短歌
Author(s)	有田, 俠花
Citation	龍南會雜誌, 162: 130-131
Issue date	1916-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6679
Right	

下宿屋に病む身は若しコノ世の疾く得ること涙するかな
眼とづれば寮顔にどよむ寄宿舎の樂しき一夜思ひ出にけり
物皆を灰色に染めよゆく秋のつゝむにあまる胸の愁よ
心よく浴槽にひたり熊本の友思ふ日よ病癒ねんとす
水のごと空は晴れたり秋風になびく大旗紅にして
武夫原の緑をふみて馳せちがう男の子いさまし馬肥ゆる秋
樂の音の秋晴の空にひゞくとき紅白緑の色きそひゆく
月清き秋の夜すがら古ローマの哀史讀まじ城跡にして

(以下運動會の歌)

秋のさけび

二三、甲二 有 田 俠 花

默々たる大阿蘇は大なる自然の歌への神である。不平になやむ若人は阿蘇の雄姿を仰げ。悲觀に生きはられぬ若人は噴火
口壁にたて。

狂はしき心しきりに叫びつゝ渦巻くけむりに石なげて見よ。
何事も大あそのけむりに秘めこめて世の謎とせむねぎなりしかな。
古さとの人等の蔑し目つめたさに旅にやすらふ姿さびしも。
義理は強しおそろしき力やすくと男一匹死など思はす。

噴火口十字に飛び交ふつばくらはなれわざこそしばしみ入りぬ。
人を憎むあまり小さき心とは思へど足らぬおのれなりけり。
三四日噴火口壁に静座してうつしよのなやみかげもあらなく。
青空に意氣の男の命とも大阿蘇は雄々しくけむりはくなり。
超然と自己の光りに生くる日ぞま幸の人のむれに入れるも。
強く強く生きよと轟く大あその力を今は身につゝみけり。
ものみなのもだねわすれてうつしよを吾の心の光りとぞせむ。

雨よ降れ

英法二年一

雅

男

雨よ降れこのもの音の夜にさねて幾夜寝がての我が惱みかも
湯に入れば水ひたと漂へりかすかに壁の香は匂ひつゝ
湯は溢る旅に疲れし身を入れて五右衛門風呂の半時を笑む
客往にて皿に残れる紅の胡桃さら／＼内に浸れり
肉の香よほのかに夢をかすめつゝ胸にし入らば人は死ぬ可し
潮見崎底の小石に手をつきて乙女招けば白雲の湧く
あはれ此の夕日に赤き船頭の時を港に残る悲しみ